

Frame by Frame～思いを紡ぐ～

JPPA 会員がそれぞれの視点で綴るリレーエッセイです。
日々の経験や気づきに触れ、ささやかな思考のきっかけとなれば幸いです。

第 15 走者：茨木 繁さん（関西支部長・(株)スタジオ・ビーアンドエム）

中古の RZ125 に乗ったその生意気な 16 歳は 1 台のバイクを追いかけてまわしたあげく、こう言った。「兄ちゃん大したことないな～」それは 1985 年バイクブーム真っ盛りの時代、バイクの聖地でも有名な神戸市六甲山裏六甲有料道路の中央付近に設けられている土で作られた大きな駐車場所。「なに！生意気いっとるねん！お前はんまクソガキやな！」「これからお前のあだ名は GAKI じゃや！」その生意気な 16 歳は 41 年経った今でもバイク関係者には GAKI と呼ばれている。そこからその少年は、その兄さんに初めて岡山県にある中山サーキットに連れて行ってもらい、初年度には 5 位の表彰台にのり、次の年には近所で小学生時代から出入りしていたバイクショップがオリジナル 2 サイクルチャンバーを販売するのに広告戦略の一環として、北は仙台にある SUGO サーキットから、三重県にある鈴鹿サーキットなど全国中のサーキットで地方選手権レースでライダーとして腕を磨かせてもらっていた。翌年 1987 年 7 月アマチュアレーサーが成績を残しバイクメーカーや有名チームにアピールしプロレーサーを目指して出場する SUZUKA4 時間耐久レース（野球で例えると夏の甲子園）に、同じバイクショップに出入りしていた通称トラさん（5 歳年上）を言いくるめバイク（NSR-250 RK）を買ってもらい、初めて 2 人で参加した。その当時エントリー台数は 600 台は優に超え決勝出走は 60 台、狭き門だった。今の様にタイヤウォーマーが無い時代に予選計測は良くて 2 周、走行順を並ぶのが遅くなれば 1 周と今考えれば相当理不尽な条件の中、周りの多大なるサポートがあり 2 周計測されたが、残念ながら予選落ち。しかし予選落ちの 61 台～

121 台までのチームは 2 時間耐久レースを走れる権利を得て、上位 3 台までが、本選の 4 時間耐久レースに出場権を与えられるルール。その 18 歳になった GAKI は予選落ちした挫折も何も考えずひたすら早く走る事だけを考え、見事 3 位に入賞し無事決勝にコマを進めた。そして 4 時間耐久レース決勝、63 番グリッドからスタートしメーカーにサポートを受けるチームや大きなスポンサーが付いたチームも出場するなか見事 10 位入賞した。無名だった GAKI はついにメジャーに踊りでます。翌年にはオーディションでヘルメットに目ん玉マークで有名な SP 忠男レーシングに所属し YAMAHA 発動機と契約。20 歳で年間 12 戦戦い全日本国内 A 級 250cc の全日本チャンピオンになり、翌年には国際 A 級 F3 クラス年間 2 位になり、それ以降 TZ250・125cc のレース専用バイクの先行開発ライダーとして全日本に世界選手権にも出場し、28 歳の時の契約更新で生意気を言ってプロとしては引退した。



レースで培ったスポンサーへの対応は営業能力と変わり、メカニックやエンジニアと会話する事、レースを引っ張る能力はマネジメントとなり、その生意気だった GAKI は 41 年経った今、ポストプロダクションの経営者として映像業界と言うレースを舞台に戦っている。